二〇二一年二月六日

ハミングもでて軽やかに蒲団干す　　む　べ

朝市の声の威勢に目刺買ふ　　なつき

一斉に水面を駈けて鴨翔ちぬ　　せいじ

マッサージされゐる背なに初音聞く　　素　秀

見え隠れしつつ一渓春奏づ　　せいじ

雪の宿上がり框に自在鉤　　凡　士

狼星を見上げ十年の夜警かな　　凡　士

蛇行して大河は海へ春霞　　せいじ

雪しまく洞に雀の一家族　　かかし

老大樹薄紅色の冬芽満つ　　凡　士

白鷺の冬日纏ひて飛来せり　　はく子

一株は鳥に残して耕せり　　よう子

探梅や行き交ふ人と二三言　　素　秀

顔洗ふ寒九の水に火照りけり　　うつぎ

窓四温ひつくり返す砂時計　　素　秀

陽光を刎ねし尾びれや寒の鯉　　小　袖

暖かき日差しに背筋伸ばしけり　　わかば

潜つても浮いても一羽ダムの鴉　　うつぎ

節分草我が誕生日知りて咲く　　うつぎ

春めくや墨絵ぼかしに淡路島　　宏　虎

毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年二月七日